



TITLE:

夏目漱石とウィリアム・ジェイムズ：「文芸の哲学的基礎」を中心に

AUTHOR(S):

佐々木, 崇

CITATION:

佐々木, 崇. 夏目漱石とウィリアム・ジェイムズ：「文芸の哲学的基礎」を中心に. 京都大学文学部哲学研究室紀要 2010, 13: 16-28

ISSUE DATE:

2010-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/137553>

RIGHT:

夏目漱石とウィリアム・ジェイムズ

——「文芸の哲学的基礎」を中心に——

佐々木崇

1. はじめに

夏目漱石はその創作活動によって日本近代文学を代表する不動の地位を得るとともに、文学についての理論的・原理的な探究を精力的に行った作家である。そうした彼の理論的探求と創作活動に影響を与えた思想としては、ヒュームなどのイギリス経験論やダーウィンやスペンサーの進化論、さらに晩年の著作におけるベルクソンなどとともに、ウィリアム・ジェイムズの哲学があげられる。そこで本論文では、漱石とジェイムズの共通点は何かという問題の一端を考察する。

漱石がジェイムズから影響を受けた過程を推測する資料については、これまでの漱石研究でおおよそ次のことが判明している⁽¹⁾。まず、彼の蔵書の中で確認されているジェイムズの著作は、『心理学原理』（1890年）、『宗教的経験の諸相』（1902年）、『多元的宇宙』（1909年）の三冊である。逆にいえば、漱石が読まなかったと推測されるジェイムズの代表的な著作は、『信じる意思』（1897年）、『プラグマティズム』（1907年）、『真理の意味』（1909年）、『哲学の根本問題』（1911年）、『根本的経験論』（1912年）などである。

次に、漱石がジェイムズの三つの著作を読んだ時期については、著作やノート・メモ類などから次のように推測されている。彼がイギリス留学から帰国してすぐの時期すなわち1902年か翌年頃に、『心理学原理』と『宗教的経験の諸相』を購入している。そして、『文学論』（1901年に構想を固め、東京帝国大学で1903年～1905年まで講義し、1907年出版）や、「文芸の哲学的基礎」（1907年4月に東京美術学校文学会の開会式で講演。同年講演の筆記録として出版）、「作家の態度」（1908年2月に東京青年会館で講演。同年出版）の内容に、二つの著作が影響していると推測される⁽²⁾。

さらに、1910年に『多元的宇宙』を読んでいる。これは1910年8月24日のいわゆる「修善寺の大患」、すなわち、彼が持病の胃潰瘍による大量吐血をして人事不省となった時期と重なり、「思い出すことなど」（1910年11月～翌年4月連載）では意識を回復したのちに『多元的宇宙』を読み、強い印象を得たことが述べられている。

本論文は、この中から講演「文芸の哲学的基礎」（以下では「基礎」と略記）に焦点を絞って、必要な範囲で「作家の態度」（以下では「態度」と略記）にも言及しながら、その

内容を概観し、彼の思想とジェイムズの思想がどのように重なるのかを考察する⁽³⁾。

2. 「文芸の哲学的基礎」の概要

以下で「基礎」の内容を、講演の流れに沿いながら概観する。この講演を取り上げる理由は、題名通りその中で漱石の哲学⁽⁴⁾が最も詳しく述べられているからである⁽⁵⁾。

2. 1 存在論と意識現象

まず漱石は、われわれの通念として、次のような世界観・存在論を述べる。すなわち、存在は、私と私以外の物、つまり「物我対立」(67 頁)として成り立っている。「世界は我と物との相対の關係で成立して」(ibid.)いる。そして、万物がその中に位置を占める広がりとしての空間、出来事が経過する時間、出来事の間の關係としての因果法則が言及され、それらは通常はだれも疑うことのない自明なことだとされる。

しかし、この「私」の正体は何か、それをよく考えると疑問が生じる。私が手に痛みを感じて撫でるとき、身体が私かという、そうではない。確かに存在するといえるのは、痛いという感じや手を撫でた時の心もちといった意識現象である。すると、「普通に私と称して居るのは客観的に世の中に実在して居るものではなくして、^{ただ}只意識の連続して行くものに便宜上私と云ふ名を与えた」(69-70 頁)のだということになる。その便宜とは、「私」を立てることで「私以外の物」が立てられ、物我の区別がつくことである。

このように、連続する意識現象を基礎にして「私」の存在を副次的・派生的な構成物とした以上、同様のことは「物」の側にも当てはまる。つまり、「物」とは何かと問われれば、見たり触ったりして確かめればよいと思われる。しかし、物を見て触っても、それは視覚や触覚を意識するだけであり、その意識が独立した物や人になるわけではない。あくまでもそれらは私の意識の中に現象として現れたにすぎない。換言すれば、私の意識を離れて物は存在しないことになる⁽⁶⁾。

ここまでをまとめると、通常存在は物我の対立としてとらえられるが、実際には「真にあるものは、^{ただ}只意識ばかり」(71 頁)であって、同じ意識現象という点で本来は区別できないものに便宜上区別を設けて構成されたのが「私」であり「物」であるということになる。

2. 2 意識内容の選択と理想

次に漱石は、存在の根本にある「意識現象」について、次のように述べる。「此意識の連続を称して俗に命^{いのち}と云ふのであります」(71 頁)。これは「意識には連続的傾向がある」(74 頁)という論点にかかわる。つまり、意識が連続もしくは推移⁽⁷⁾することの反対は、意

識が切断もしくは停止することであろう。意識には連続的傾向があること、すなわち、われわれが意識の連続を望み、切断を拒むということについて、われわれが生きたい、死にたくない并希望するという根本的な事実につけて彼は説明するのである⁽⁸⁾。

こうして、われわれが意識の連続を望むのだとして、次に問題となるのは、我々がどのような内容の意識を、どのような仕方・順序で連続させるのか、ということである。そもそもこれが問題となるためには、選択という事実が前提とされると彼は述べる。なぜなら、連続される意識の内容に関して、我々の側にある程度の自由すなわち選択の余裕がないならば、この問題が生じる余地はないからである。そして、この問題に対して複数ありうる答えのうちで、どの答えを選ぶべきかという標準・指針となるのが理想である。

これを命で言いかえれば、まず、われわれには生きたいという傾向がある。そして次に問題となるのは、ただ生きるのではなく、どのような生を選択するか、生きる意味を何に見出すかということである。そしてその選択に範囲と指針を与えるのが理想である。

2. 3 物我の分化

そして、意識の連続についての選択を行うために、意識の分化作用および統一作用が起こる。つまり、意識の連続の中に差異・区別が設けられて分化が起こり、類似の意識が統一される⁽⁹⁾。こうした過程はすべて、われわれが複数の可能性の中から特殊な意識の連続の方向を選択し、その連続の中に何らかの意義を見出すために行われるのであり、その結果として生じる「便宜上の抽象」(78 頁)であって、あくまでも根本的に存在するのは意識の連続である。まず「時間」、「空間」、「数」、「因果法則」がそうした便宜上の抽象・仮定として言及され、冒頭にあげられた「我」と「物」もこうして生起する。そして、この分化・統一作用は進行するほど精密になっていく。

まず「物」については、感覚できる物を色や形、音や香りや味などで分類する⁽¹⁰⁾。そして、こうした過程が進んで「意識の材料が多ければ多い程、選択の自由が利いて、ある意識の連続を容易に実行できる一、即ち自己の理想を実行し易い地位に立つ」(84-5 頁)ことになる。逆にこの過程を進められず意識の連続が単調で平凡な人は、理想もない思想の乏しい人であり、「いくら金銭に不自由なくとも、いくら地位門閥が高くても、(中略)昏昏蒙蒙々々としてアミーバのような生活を送」(85 頁)ることになる。

同様に「我」に対しても分化作用を発展させれば、身体と精神が区別され、さらに精神は知・情・意の三つに区別される⁽¹¹⁾。そして、この我の三つの作用と物との関係によって、人間にかんする次のような分類が可能となる。すなわち、「物に向かって知を働かす人と、物に向かって情を働かす人と、それから物に向かって意を働かす人」(88 頁)である⁽¹²⁾。つ

まり、主に知を働かせて物の関係を極め明らかにする人が哲学者・科学者であり、情を働かせて物の関係を味わう人が文学者・芸術家であり、意を働かせて物の関係を改造する人が軍人・政治家・職人などと呼ばれる。こうして意識内容の分化が進めば、各人が知・情・意のうちのいずれを主に働かせて生きていこうとするかによって、それぞれの人の理想が別れてくることになる。

2. 4 文学の理想

そして漱石は、この講演の聴衆に関連する文学の理想について議論を展開する。先にみたように、文学者は私の三つの要素のうち情を主に働かせて生きていきたいと望む種類の人間である。では「情を理想とする」とはどういうことか。情を働かせて物の関係を味わうといっても、場合によっては知によって物の関係を明らかにしたり意志によって物の関係を改造したりしなければ味が出てこないこともある。したがって、文学者も知や意志を働かせ、ある程度までは同時に哲学者であり実行的な人であるといえる。

しかし、文学者が他の種類の人と異なるのは、知や意志を働かせるのがあくまでも情によって物の関係を味わうためにそうするのだという点と、そのように味わうためには当の物はどこまでも具体的・感覚的なものでなければならないという点である。すなわち、文学者はあくまでも感覚できる具体的なものに即して、抽象などによってその性質を破壊しない範囲で知や意志を働かせるのである。要するに、「文芸家の理想は感覚的な或物を通じて一種の情^{じやう}をあらはす」(91 頁)ということである。

そしてさらに、文学の理想は次のように分類されると彼はいう。ひとつは、いわば物に対する理想であり、感覚物そのものとの直接的な関係において何らかの情が生じるという理想である。この代表は、美に対する理想である。つまり、自然や人の美しさを味わい、それを詩に詠じたり絵に描いたり、またその絵画や作品を鑑賞したりすることで実現される理想である⁽¹³⁾。

もうひとつは、いわば我に対する理想であり、感覚物を媒介・道具として何らかの情を得るという理想である。この理想は次の三つに分けられる。第一に、知を働かせて物の関係を明らかにすることで情の満足を得るという理想で、これは真に対する理想である。例えば、ある文学作品の中で、登場人物に対する心理描写がうまく行われるとする。そしてそれがあらかじめ我々の予想する因果系列と一致したり、あるいはそれよりも深い新たな分析が示されたりすると、「なるほどそうだ」とわれわれは感心したり納得したりする。このようなとき、この作品の作者と読者に「真に対する情^{しん}の満足^{じやう}」(95 頁)が生じるのである。

第二に、物を通じてある情を表すことで情の満足を得るという理想で、この代表は善に

対する理想である⁽¹⁴⁾。この場合、情が二回登場して混乱しやすいが、作者が作品を書いたり読者がそれを読んだりする際に働かせる情と、作品中にいわば材料として使用される情とは次元の違うものである。例えば、作品中の登場人物たちが示す愛憎、友情などの情に対して、作者も読者も感情移入によって情が刺激され喚起される。しかし、この二つの情は原因と結果という次元の違うものである。

第三に、物を通じて意志を表すことで情の満足を得るという理想で、これは莊嚴という理想と呼ばれる。例としてあげられているのは、いわゆる **heroism** に対するわれわれの情緒、すなわち、命を賭して冒険に乗り出す人や、道義的な理想を実現するために行動する人の話を読んで心にある種の感じをもつことである。以上の文学における四つの理想をまとめると、次のようになる(99 頁)。

- 1) 感覚物自体に対する情 (美の理想)
 - 2) 感覚物を媒介として知・情・意の三要素が働く場合
 - (い) 知の働く場合 (真の理想)
 - (ろ) 情の働く場合 (善の理想)
 - (は) 意志の働く場合 (莊嚴の理想)
- (真善美壮それぞれの理想には、反対の状態として偽悪醜弱が対応する。)

2. 5 文学の現状への批判

さて、こうして文学者の理想が整理されたが、実際の文学作品の中にはこれらの理想に対する情操がある程度の割合でそれぞれ混合した状態で現れる。しかし、それぞれの作品の中に、四つの理想のうちのいずれが最も顕著に表れているかという形での分類はできる。

そして、以上の文学の理想について、漱石は次のように主張する。まず、この四つの理想のうちのいずれが顕著となるかは、時代と個人によって大きな変化を受けることである。次に、この四つの理想は、「甲を以て乙に隷属すべき理由はどうしても発見出来ん」(100 頁)こと、すなわち、「互^{たがひ}いに平等な権利を有して、相冒^{あいをか}すべからざる標準」(101 頁)であることである。したがって、文学作品を批評する際、ある理想が欠如しているという理由だけで低く評価するのは間違っている。ただし、ある作品がある理想を表現することで結果的に他の理想を欠いている場合と、積極的に他の理想を否定する場合とは区別すべきであり、後者の場合には他の理想を尊重する側からの批判を甘んじて受けるべきであるという。

こう述べる際に彼が念頭に置いているのは、当時流行した文学上の自然主義である。つまり、「只^{ただ}真の一字が現代文芸ことに文学の理想である」(104 頁)という状況に対して、四

つの理想の同等性を主張する彼は、一方で真の理想自体の価値は認めつつ、他方で「現代の文芸で真を重んずるの弊」(106 頁)として、真の理想のもとに他の理想が否定されることは批判する。すなわち、「人間の観察と云ふ者は深くなると狭くなるもの」(104 頁)であり、自分の関心のある部分にだけ集中して他を度外視する「抽出法」(105 頁)に陥りやすい。しかし、全体としての具体的な人間や世界については、ほかにも様々な観点からの理解が可能であって、抽出法がそのほかの観点を否定してこれを妨害するならば、それはあたかも、徒歩や自転車や車に乗る人もいるのに「交通便利の世だと、鈴を振りたてゝ、電車が自分勝手な道路を無茶苦茶に駆る様なものである」(106 頁)。

2. 6 人間一般の理想、文学の使命

漱石は以上の立場を、具体的な文学作品（シェイクスピア、モーパッサン、ゾラ、イブセン）をあげて説明した後、最後に文学の使命について述べる。まず漱石は、以上の文学の四つの理想が「ある意味から云ふと一般人間の理想」(116 頁)であるという。

したがって、この四つの理想とは、要するに「如何にして生存するが尤もよきか」(118 頁)「如何に生きて然るべきか」(135 頁)という普遍的な人生の問題、生き方の選択の範囲に関わる問題に対する答えである。

ところが、世の中には文学者を役立たずの暇人であるかのように誤ってみなす者がいる。それに対して文学者は確信をもって「何だ人生の意義も理想もわからぬ癖に、生意気を云ふな」(135-6 頁)と超然と構えるべきである。四つの高い理想を実現する文学者とは本来、人間として最も高く広い理想を有する人格を備えている。なぜなら、理想はそれをもつ人間の人格に備わるものだからである。

ただし、文学者の側にどれだけ新しく、深く、広い理想があつてそれを世間で実現しようとしても、世間の側がこれを妨げて許さないことがある。そのとき、優れた技巧を発揮して自らの理想を文学作品という形で表現することが文学者の使命となる。

そして、優れた技巧によって理想を表現した「人生に触れる」(129 頁)作品が、機縁の熟した読者の意識の連続に一致し、究極的には「物我の境を超越する」(132 頁)ような完全な「還元的感化」(130 頁)を引き起こし、さらにはそれが広がって「社会の大意識」(137 頁)に影響を与えるなら、その作家と作品は「永久の生命を人類内面の歴史中に得て」(ibid.)、文学の使命は完全に達成されるのである。

3. 「基礎」の議論とジェイムズの哲学

3. 1 直接的な対応関係

以上の「基礎」の議論がジェイムズの哲学とどのように重なるのかを考える際に、最初に指摘できるのは次の点である。すなわち、すでに多くの漱石研究者が同意しているように、「基礎」冒頭の存在論と意識現象の主要な主張が、ジェイムズの『心理学原理』第9章「思考の流れ (The Stream of Thought)」の影響のもとに成立していることである。

ジェイムズは思考・意識の5つの特徴を次のように要約している。「①思考はどれも、ある人格的な意識の中の一部となる傾向をもつ。②思考は個々の人格的な意識の中において、つねに変化している。③思考は個々の人格的な意識の中において、感知される仕方では連続的なものである。④思考はつねに、それ自身とは独立な別のものにかかわっているように見える。⑤思考はこうした事物のある部分に関心を払い、別の部分を排除しており、歓迎したり拒否したりしている。つまり、一言でいえば、どの時点においても選択している」(James, 1950, vol.1, p. 225 ; 伊藤, 2009, p. 59)。

漱石が意識の連続と選択について述べる背景には、明らかにジェイムズの③と⑤の規定があると考えられる。また「態度」でわれわれの心を「幅のある長い河」に喩える個所(184頁)も、ジェイムズの記述と一致する(*ibid.*, p. 239)⁽¹⁵⁾。同じく「態度」の中で同様に意識の連続および選択が説明される個所(162頁)では、実際にジェイムズの名が紹介され、同じ四角形の例(*ibid.*, p. 285)⁽¹⁶⁾が言及されている⁽¹⁷⁾。さらに、そうした選択の中から物我の分化が生じるという漱石の主張も、全宇宙を「自我 (me)」と「非自我 (not-me)」の二つに分割するというジェイムズの記述(*ibid.*, p. 289)と重なるものとも理解できる⁽¹⁸⁾。

3. 2 哲学的な共鳴関係

しかし、こうしたいわば直接的な言及や対応以外にも、哲学的な論点について、一見すると漱石独自の展開と見えところにもジェイムズの思想と共鳴する部分はないだろうか。例えば、存在するものは意識現象であり、物我の対立は副次的・派生的な構成物だと漱石は述べるが、これは厳密には心と物の二元論に立って現象としての心理を記述する『心理学原理』でのジェイムズの立場を踏み越えるものである。しかし、その後のジェイムズの存在論的探求の結果、その二元論は退けられて主観主義と客観主義の対立を止揚する中性的一元論や純粋経験の立場が提唱されることを考えれば、漱石の存在論は重要な点でジェイムズと共鳴するといえる。そこで次に、「基礎」の議論について、三つの疑問点を考えながら、漱石とジェイムズとのこうした共鳴関係を考えたい。

その三つの疑問点は、漱石独自の哲学的な展開、および彼がそもそも哲学的考察を行う理由にかかわる。すなわち、第一、第二の疑問点は、彼の議論を一つの独立した哲学として見たときに、はたしてそれが首尾一貫したものといえるのか、という問題にかかわる。

そして第三の疑問点は、なぜ文学者である彼が哲学的な考察を必要としたのか、という問題にかかわる。つまり、漱石の哲学自体の一貫性と成立理由という重要な疑問点を考察する中から、彼とジェイムズの共鳴する論点を取り出せるかどうかを探っていきたい。

第一に、「2.2 節」で見たように、漱石は意識の連続を命と言い換えている。では、なぜ意識の連続が命と呼ばれるのだろうか。一見すると唐突なこの言い換えによって、彼の議論には次のことがもたらされる。ひとつは、意識の連続的傾向という抽象的な論点が、われわれが生きたいと希望するという身近で切実な事実につけられて説明されることである。もうひとつは、意識内容の選択という論点も、われわれがただ生きるのではなく、どのような生を選択するか、生きる意味を何に見出すかという形で展開されることである。

こうして文学的な意識と理想の探求という漱石独自の議論が展開されるのだが、この言い換えによって実践されているのは、「2.4 節」でも見たように、文学を他の探求から区別する独自性、すなわち、あくまでも具体的・感覚的な全体を通じて表現するという方法である。例えば、人間の意識・心の内実に取り組む際にも、心理学は個々の作用を分離して抽象する傾向があるのに対して、文学は微妙な心の働きについての極度の分化を行い、それらの各要素が互いに影響を及ぼしあって結びついている全体としての人間を描写しようとする。このように、感覚でとらえられる具体的な全体に即して知・情・意を働かせることに文学の特殊性があるとされ、彼は意識の連続と選択という問題に対してもその手法を実践し、生きる意味を何に見出すかという主題へと議論を展開したと考えられる。

すると、こうした漱石の議論の方法とその帰結は、ジェイムズと共鳴する点がある。まず感覚的・具体的な全体に取り組むという方法は、ジェイムズが『心理学原理』での意識の解明において採用するものでもある。人間の意識を原子的で単純な諸観念に分離し、その連合や合成によって意識全体を解明しようとする立場を批判して、彼は全体としての具体的な心の状態から出発する方法を提唱する。「心理学が出发点において措定する権利をもつ唯一のものは、思考そのものであり、それこそが最初に取り上げられ、分析されねばならない」(James, 1950, vol.1, p. 226)。そして彼が提唱した意識の連続という主張に直結する重要な意味をこの方法はもっている。漱石の述べる文学の方法は、このジェイムズの立場と共通性をもつものである。

さらに、漱石が議論の展開の中で取り出した、生きる意味を何に見出すかという主題も、ジェイムズにとって重要な問題のひとつである。ジェイムズの著作『信じる意志』の中には文字通り「人生は生き甲斐があるか (Is Life Worth Living?)」と題された論考が存在する。

「目に見える自然と称せられるもの、いいかえればこの世はバールないし外観に過ぎず、これを補う目に見えぬ別の世にこの世の完全な意味が存在する」(James, 1979, p. 43)という

希望のもとに「人生を恐れてはいけない。人生には生き甲斐があると信じよ。そうすればこのあなたの信念がその事実をうみだす一助となるだろう」(ibid., p. 56)と彼は主張する。それに対して超自然的な存在に懐疑的な漱石は、別の形でこの問題に誠実に取り組むことになるはずである。しかしいずれにせよ、両者の間でこの問いの重要性は共有されているのである。

第二に、「2.6 節」で述べられた、文学者から人間一般への理想の拡張について、漱石は説明を行っていないが、議論の展開は必ずしも明白ではない。つまり、この拡張は、彼の述べた我の三つの作用と物との関係による人間の分類と両立しないようにみえる。すなわち、主に情を働かせる文学者以外にも、知や意志を主に働かせる人間もいる。すると、文学者の理想がそれ以外の人間も含めた人間一般の理想であるとなぜいえるのか。

しかし、この問題については次のような解釈が可能であろう。すなわち、人間の意識内容に関する分化として知・情・意があげられたのだが、実はこのうち人間の意識にとって最も重要な位置を占めるのが感情であるという主張がこの拡張の背後にあると理解できる。そしてこの解釈は、同講演で彼が次のように述べていることから推測できる。すなわち、「吾人の心裏に往来する喜怒哀楽は、それ自身に於て、吾人の意識の大部分を構成するのみならず、其発現を客観的にして、之を所謂物(多くの場合に於ては人間であります)に於て認めた時にも亦大に吾人の情を刺激するものであります」(96 頁)。つまり、感情がもっとも重要な意義をもつことが人間意識の普遍的な事実であり、その事実はどのような意識の連続を選択する人間にも当てはまるという主張が、彼が文学者の理想を人間一般の理想として拡張する背後にあるのではないかと解釈できるのである。

もしこの解釈が成り立つとすれば、こうした感情の重視はジェイムズの思想と次のような形で重なる。意識の連続と並んで心理学上の重要な貢献とみなされているジェイムズ・ラング説とは、ある事実の知覚が感情を喚起し、その感情が身体的表出を引き起こすという通説に対して、「身体的変化は刺激を与える事実の知覚の直後に起こり、この変化の起こっているときのこれに対する感じがすなわち感情である」(James, 1950, vol. 2, p. 449)と主張する。「われわれは泣くからか悲しい、殴るから怒る、震えるから恐ろしい」(ibid., p. 450)と表現されるこの主張は、感情・情念について新しい見方を提唱し、それまで見逃されがちだった感情に対する反省を広く促した主張である⁽¹⁹⁾。

そして彼自身もその後の展開の中で、人間における感情の意義をより重視する主張を行った。例えば、彼は「信じる意志」で次のように述べる。「われわれの意見には、われわれの感情的な本性の影響が事実上認められるだけではなく、いくつかの意見のうちどれかひとつを選択する際に、この感情の影響力がわれわれの選択の不可避免的であるとともに合法

的な決め手とみなされなければならない」(James, 1979, p. 25)。ここには彼独自の合理性の理解、すなわち、知性、意志、嗜好、感情といった諸要素は混在し、協同して働くという人間精神についての理解が表現されている。

こうして信念形成の要因の多様性・複合性、特に感情や意志の働きを強調し、それを宗教的信念に適応する試みをジェイムズは精力的に行ったのである。確かに、ここでも宗教的信念に対する漱石の慎重な態度が両者の差異をもたらすであろう。しかし、具体的な全体としてみた人間精神における感情の重要性を両者は共有していると考えられるのである。

最後に、そもそもなぜ漱石はこうした哲学的考察を必要としたのか、言い換えれば、文学の哲学的基礎を漱石が探求した理由は何であろうか。この理由のひとつとして考えられるのは、文学が成立する前提となる意識現象や存在論にまで遡って考察することによって、自然主義や浪漫主義といった通俗的な分類に代えて、個々の文学作品がもつ特性により一層即した分類と理解が可能となるという点である。

こうした「主義」による分類の不都合・弊害について、彼は幾度となく指摘している⁽²⁰⁾。既にみたように、「基礎」でも自然主義を念頭において、真の理想による他の理想の否定に批判がなされた。また「態度」でも、心理現象の解剖に基づく「発生学」(181頁)の観点から主観的態度と客観的態度を分類し、同様の考察を彼は進めている(188頁)。

こうした考察によって漱石が実践しているのは、流派が互いに批判しあうだけの硬直した不毛な対立を超えて、より深く斬新な視点による分類を示すことによって、個々の作品がもつ多面的な特性についてのわれわれの理解を深めることである。さらに、さまざまな意識の流れの中から選択によって構成された異なる理想が、それぞれ平等の権利と価値をもって共存しているのを示すことで、特定の主義による他の立場の排除ではなく、複数の異なる立場が共存し、相互に影響を及ぼしあうような多元論的な展望を漱石は示している。

そしてこのことは、ジェイムズの哲学の重要な特徴でもある。例えば『プラグマティズム』で彼は、哲学における理論上の対立・ジレンマに対して、「固い精神」と「柔らかい精神」といった哲学者の気質による斬新な分類を提示し、個々の哲学がもつ特性を多角的な面から理解しようとする(James, 1975, p. 13)。そして、特定の主義によって他を排除するのではなく、異なる思想が共存する事態を彼は積極的に肯定し、相互の対話や協調や生産的な影響の道を探る多元主義を彼は提示する。この多元主義的な展望という点でも、ジェイムズと漱石は立場を同じくしているのである。

さらに、こうした多元主義の観点から、文学上の極端な自然主義が人間の自由意志の否定につながる可能性を「態度」の中で漱石は危惧している(232頁)。そしてジェイムズにとっても、この自由意志の肯定という問題は、生きる意味の問題と並んで彼の哲学的探求を

当初から支えた大きな要素のひとつであったのである⁽²¹⁾。

4. おわりに

漱石はジェイムズの心理学と哲学をひとつの手掛かりにして、それを独創的な形で展開しながら文学の基礎となる哲学を論じた。以上で概観した範囲に限っても、現代の文学だけでなく哲学にとっても多様な洞察を彼の議論から引き出すことができるだろう。

「基礎」についての疑問を考察しながら、漱石とジェイムズの共通する側面を確認した本論文は、そうした豊かな可能性のごく一端を取り出したに過ぎない。具体的・感覚的な全体としての人間から探求を始めるという方法、「いかに生きるべきか、生きる意味とは何か」という問い、人間存在における感情の意義、価値や理想についての多元主義的な展望、人間の自由意志の肯定、漱石とジェイムズはこうした方法・問題・主張を重視する点において共鳴する思想をもっている。

こうしたテーマをめぐって、ジェイムズが哲学を展開していったように、漱石もその後の文学作品において独自の探求を行ったはずである。では、それらの主題は漱石の作品の中でどのような表現を与えられたのか。それは今後の課題としなければならない。

註

(1) 資料に関して主に以下の著作や註(2)にあげた諸論文を参照した。『群像 日本の作家1 夏目漱石』(小学館, 1991年)、小倉脩三『夏目漱石 ウィリアム・ジェームズ受容の周辺』(有精堂, 1989年)、同「文芸の哲学的基礎、創作家の態度」、『夏目漱石の全小説を読む』(學燈社, 1994年)所収。また、漱石自身のノートやメモ類については、村岡勇『漱石資料—文学論ノート』(岩波書店, 1976年)によって整理された形で読むことができる。

(2) 日本文学研究者による『文学論』と『基礎』、『態度』2講演とに関する論争は、主に次のような論点にかかわる。すなわち、ひとつは『文学論』と2講演の間の、もうひとつは、2講演の間の漱石の主張の変化をどう解釈するか、という問題をめぐる論争である。詳細は以下の諸論文を参照。島田厚「漱石の思想」『文学』, 28-29, 1960-1961)、大野淳一「漱石の文学理論について」(『国語と国文学』, 52, 1971)、重松泰雄「漱石とウィリアム・ジェームズ」(『国文学』, 16, 1971)、『文学論』から『文芸の哲学的基礎』『創作家の態度』へ: ウィリアム・ジェームズとの関連において」(『作品論夏目漱石』, 双文社, 1976)、「漱石晩年の思想(上・中・下)」(『文学』, 46-47, 1978-1979)。本論文は、「基礎」を中心に疑問点を考察しつつ、漱石とジェイムズの哲学的な共通点を探ることを目的にする。

(3) なお、こうした理論的探求とともに漱石は創作活動にも着手しており、「基礎」は朝日新聞社入社月の講演で「態度」の講演までの間には入社第一作『虞美人草』が執筆されている。また「態度」は『坑夫』の執筆時の講演であり、同年には『文鳥』、『三四郎』も執筆されている。しかし本論文では、そうした創作活動までは取り上げられない。

(4) 漱石の哲学観を見る一つの材料として、『文学評論』第2編1がある。そこで彼は、哲学とはもともとよく考えることであるとして、次のように述べている。「哲学者と云ふ者は或時代に在つて其中の最も善く考へる人、物を概括する人、換言すれば智力と云ふ、人間の能力を最もよく利用した人である」(『漱石全集』第15巻, 1995, 62頁)。ちなみに、「18世紀英文学」をテーマにした1905年のこの講義では、イギリス経験論が紹介されている。

(5) 「基礎」と「態度」の2講演については、次の全集版から引用し、その頁数を示す。『漱石全集』第1

6 巻（岩波書店、1995 年）。なお、以下の内容の項目分けは本論文の著者によるものである。

(6) これは講演なので当然漱石がいて、その目前には聴衆がいる。しかし、この議論によれば本当に存在するのは意識現象のみである。この状況を利用して彼は述べる。「根本的に云ふと失礼な申 条だが貴所方は私を離れて客観的に存在しては居られません。—私を離れてと申したが、其私さえ所謂私としては存在しないのだから、況んや貴所方に於てをやであります。いくら怒られても駄目であります。貴所方はそこに御座る。御座ると思って御座る。私もまあ一寸さう思っ居ます。居ます事は、居ますが只かりにさう思っ差し上げる迄の事であります」(70 頁)。概要では十分に触れられないが、講演の中にはこうしたユーモアが満載である。

(7) 漱石はここで『文学論』第 5 篇での意識推移の原則に言及している。

(8) 厳密には「私」はまだ分化していないので、この段階で現れる「私・われわれ」という言い方は説明の便宜上のものであることを漱石自身も注意している。なお、われわれが生きたいと希望することについて、彼は進化論やショーペンハウエルの「生欲の盲動的意志」に言及している (74 頁)。

(9) 分化作用と統一作用は並行して起こるので、主に分化作用について説明される。

(10) より詳しくは、物を感覚物である自然や人間などと、超感覚物である神や幽霊などに分けるともいわれるが、後者については、「あるかないか知らない」(83 頁)として主題とはされない。

(11) この意識内容の分化は文学と並んで心理学が取り組むものでもあるとされ、この問題はのちにも触れられるが、両者の間には違いがあるという。すなわち、心理学には心の作用を個々に分離して抽象してしまう傾向がある。それに対して文学は、微妙な心の働きについての極度の分化を行いつつ、それらの各要素が互いに影響を及ぼしあって結びついている全体としての人間を描写しようとする。つまり、文学者は「人間を識別する能力が発達した人」(86 頁)で「人間と云ふものは、こんなものである」(87 頁)ということについて優れた眼力を備えていなければならない。

(12) 他の分類と同様に、ここでの分類は程度の差を許容するものである。すなわち、知・情・意は完全に独立したものではなく相互に結びついたものであるので、どの要素を「主に」働かすかによって分類されたものである。

(13) この美的情操という理想以外にも、漱石は突兀、飄逸 などといった西洋美学に由来する概念以外の理想にも言及している。

(14) この善は、愛・友情・忠・孝・義侠心などに分化されうる道徳的情操の総称として用いられている。

(15) 断片的に切られている印象を与える「鎖 (chain)」や「列 (train)」ではなく、「川 (river)」や「流れ (stream)」が意識の比喩としては適切であるとジェイムズは述べる。「意識は断片をつないだものではなく、流れているのである」(James, 1950, vol. 1, p. 239)。

(16) テーブルの天板が方形といわれるのは、無数の感覚の中から選択した結果であるという例である。

(17) この他にも「態度」では、客観的態度によって今後の文学が取り組むべき主題のひとつとして、ジェイムズの宗教的経験が言及されている (248 頁)。これは明らかにジェイムズの著作『宗教的経験の諸相』をふまえてのことであろう。

(18) 加えて、漱石による私の三作用と物の関係による人間に関する分類や、真善美荘という理想の分類にも、同一ではないにせよある程度重なりとみなしうる記述をジェイムズに見出すことは可能である。前者については、『心理学原理』第 10 章「自我の意識」において、経験的諸自我の間の選択について述べている部分がある (James, 1950, vol. 1, p. 309)。後者については、心の選択作用に関して、理性の働く推論や、美的、および倫理的な分野で選択が働くことをジェイムズが述べている部分がある (ibid., pp. 286-288)。

(19) この説を述べる直前に、ジェイムズは過去の心理学における感情についての単なる記述の文献が総じて退屈であるのに比べて、具体的な事象を通じて感情が表現される小説がわれわれの興味を喚起し、喜びを与えることに言及している (James, 1950, vol. 2, p. 448)。この点も、「基礎」での漱石の思想と重なるものを含んでいる。

(20) 例えば、1910 年の「イズムの功過」では次のように漱石は述べている。「人間精神上の生活に於て、吾人 がもしイズムに支配されんとするとき、吾人は直に与へられたる輪廓の為に生存するの苦痛を感じる者である」(『漱石全集』第 16 巻、1995、334 頁)。

(21) 若き日のジェイムズは、鬱状態の中の自殺願望から、ルヌヴィエの著作の自由意志論に感銘を受けて立ち直った経験をもつ。「自由意志は（中略）幻想ではない。私は自由意志の存在を信じるという行為において、自分の自由を発揮する」（“Diary: April 30, 1870.” John J. Mcdermott, ed., *The Writings of William James*, University of Chicago Press, 1977, p. 7）。『心理学原理』での包暈（fringe）や『宗教的経験の諸相』での潜在的自己意識（subconscious self）など、意志の範囲を超える無意識的なものへの関心が継続的に示される一方で、彼の哲学の中心にはつねにこの自由意志の肯定の問題がある。

文献

伊藤邦武 (2009). 『ジェイムズの多元的宇宙論』, 岩波書店.

夏目漱石 (1995). 『漱石全集』第16巻, 岩波書店.

James, W. (1950). *The Principles of Psychology*, 2 vols, Dover Publications, Inc.

(短縮版 *Psychology, Briefer Course*, 1892. : 『心理学（上下）』, 今田寛訳, 岩波文庫, 1993 年)

James, W. (1975). *Pragmatism*, Harvard University Press.

(『プラグマティズム』, 榊田啓三郎訳, 岩波文庫, 1957 年)

James, W. (1979). *The Will to Believe*, Harvard University Press.

(『信ずる意志』, 福鎌達夫訳, 日本教文社, 1961 年)

[関西大学非常勤講師・哲学]